

命はひとつ

田尻小 五年

武田

隼斗

「命」と聞いて一番最初に思い浮かぶ言葉は「ひとつ」です。

ぼくは小学三年生の時に、絶対に死にたくないと毎日思うことがあって家族の前で泣いていたことがあります。そう考えるようになつたきっかけは、祖父と将来の話をしているときに祖父が、

「隼斗が成人したときには、じいちゃんも死んでるかもな」といふ言葉を聞いてからでした。

その言葉を聞いてから「死んだらもう会うことができない」と考えるようになり、悲しくて涙が出てきました。そのときに、母が、「大丈夫だよ、みんなが」と一緒にだよ。と言ってくれて安心したときがありました。

最近、テレビで殺人事件や自殺のニュースを沢山見ますが、「どうして大切な命をなくしてしまうのだろうか」と思います。

以前、テレビで全身まひになつた人の生活  
 を見て、毎日一生懸命生きていて素晴らしい  
 と思ひました。ぼくは母に、  
 「もしこの先、手足も動かせない、話すこと  
 もできなくても命がある限り生き延びたい。  
 と言つたら、母は、  
 「わがつたよ。命があることが大事なものね。  
 と言つてくれました。  
 母と街を歩いていると体が不自由な人と出  
 会うことが沢山あり、今までも母と一緒に、  
 車いすの人がエレベーターに乗れずに車いす  
 を押してあげたり、目の不自由な人がお店を  
 探していたので声をかけてあげたり、フラス  
 トフード店で杖をついた高齢の人が隣に座つ  
 ていてフラスコを置いていたのでゴミ捨てを手伝  
 ってあげました。  
 みんなが助け合ひの精神を持つていれば、  
 体の不自由な人も過ごしやすくなり、ひとつ  
 の命を大切にしようと思ふ人が増えていくの  
 ではないかと思ひました。